

Title	内なる他者への希求： ポストコロナル理論を手がかりにしたジプシー像の分析
Sub Title	Das Verlangen nach dem inneren Anderen : Eine Analyse der Zigeunerbilder unter dem Aspekt postkolonialistischer Theorien
Author	野端, 聡美(Nobata, Satomi)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.28 (2011. 3) ,p.69- 84
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20110331-0069">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20110331-0069</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 内なる他者への希求

ポストコロニアル理論を手がかりにしたジブシー像の分析

野端聡美

## 1、ポストコロニアリズムの拡大解釈

フランツ・ファノン、エドワード・サイード、ホミ・バーバなどの研究者によって代表されるポストコロニアル理論とは、一般的に次のことを指向すると解釈される。つまり、十六世紀以来の植民地主義を脱構築すること。そして、植民地政策のもとで作り出された植民者と被植民者の間の力関係、さらにその力関係を作り出したシステムを説明し、暴くことを目的とした理論である。

当然ながら、ポストコロニアル理論で主に扱われてきたのは、十六世紀以来のヨーロッパと非ヨーロッパの関係性であった。例えばファノンが「黒い皮膚・白い仮面」(Schwarze Haut, weiße Masken 1952)の中で論じたような、宗主国フランスと植民地アルジェリアの間に成り立つ人種や言語、文化の力関係、サイードが「オリエンタリズム」(Orientalism 1978)で扱った、ヨーロッパの欲望を投影する対象として作り出された中東やエジプトのイメージなどである。黒人、アジア人、アラビア人などの被植民者や彼らの文化、社会がどのように描かれるか、そしてどのような過程を経てそのイメージが付与されるに至るのかは、ポストコロニアル理論で特に重点的に扱われる問題である。すなわち、植民地の住民、言語、文化などを描写する際には、必ず植民地言説の力関係が働きかけていることに留意すべきであり、被植民者とは、ヨーロッパの利益のために生み出された「他者像」である、と解釈されるのである。他者像を巡る考察は、植民地言説の分析に不可欠なものである。なぜならヨーロッパからの一定の距離と差異を前提として生み出された他者像は、同時に「ヨーロッパ」を規定する

根拠にもなるからである。

ポストコロニアル理論は、今日その定義が拡大されて解釈され、新たな文脈で応用されている。その際新たに与えられた視点は「内なる他者」である。<sup>1)</sup> 多数派が自己を定義し、正当化するための手段として「他者」を求めるのは、海を隔てた宗主国と植民地の間にのみ見られる事象ではない。例えば、多民族をその中に抱えていたかつてのハプスブルク帝国においては、ドイツ的な人種、言語、文化、価値観と、非ドイツ的なそれらとの間に優劣が設けられていた。このような、ヨーロッパ内に見られる中心と周縁の関係は「内的コロニアリズム」と呼ばれている。<sup>2)</sup> 内的コロニアリズムの力関係では、支配層も、非支配層も同じヨーロッパ人（もしくはヨーロッパに住んでいる民族）であるため、中心と周縁の間の地理的距離は意味を持たない。ハプスブルク帝国の支配層であったドイツ系民族にとっての「他者」、例えばマジャール人、スラブ人、ユダヤ人、ジプシー<sup>3)</sup>らは、「ドイツ的ではない」性質、外見を与えられ、イメージを固定化されていた。つまり、特定の民族に特定のステレオタイプが与えられ、秩序や文化の中心を担ったドイツ系民族からどれほど隔たっているか、その距離によって表象世界に配置されていったのである。

内的コロニアリズムは、現在オーストリアの文学研究、文化研究の領域で盛んに議論されている。扱われる中心的なテーマは、ヨーロッパの「～人」という、ナショナリティや文化、人種を基準になされる区別と、そこに付与されるステレオタイプである。こうした「ヨーロッパの民族間に見られる政治的、法律的、文化的不均等」は、ヨーロッパと非ヨーロッパと

1) Vgl. Wolfgang Müller-Funk u. Brigit Wagner: Diskurse des Postkolonialen in Europa, in: Eigene und andere Fremde »Postkoloniale« Konflikte im europäischen Kontext. Hrsg.v. Wolfgang Müller-Funk u. Brigit Wagner, Wien 2005. S.21-22.

2) Ebd.S.22-23.

3) 「ジプシー」とは英語 Egyptian から派生した蔑称である。現在は「ロマ」もしくは「シンティ」が正式な名称とされているが、扱う文学作品では専ら「Zigeuner（異端者というギリシャ語から派生した蔑称）」が用いられていることを鑑み、本論ではそれに対応する訳として「ジプシー」という名称を採用する。

いう二分法以外のパラメーターに沿って生み出されている。そのパラメーターとして挙げられているのは、一つ目に産業や技術の進歩の度合い、二つ目にプロテスタント、カトリック、正教などの宗教上の違い、そして三つ目に、特に中欧地域で重視された、ドイツ的か非ドイツ的か、という違いである。<sup>4)</sup>

ポストコロニアル理論がその中心的な問題として、支配層から希求される「他者」を扱うのであれば、内的コロニアリズムにおける「内なる他者」もまたその分析対象としてふさわしいと言える。本論では、例としてオーストリア文学作品における支配層と被支配層の關係に注目し、とりわけその異質性と周縁性を強調されるジブシーの表象に言及することで、「内なる他者」をポストコロニアリズムの視点から論じることを試みたい。

## 2、ミムクリに基づき階層化される「内なる他者」

ジブシーを含む「内なる他者」と支配層の力關係を効果的に描写している文学作品として、本論ではマリー・フォン・エブナー＝エッセンバッハ (Marie von Ebner-Eschenbach 1830-1916) の短編小説 *Er laßt die Hand küssen* (1886)、そしてニコラス・レーナウ (Nikolaus Lenau 1802-1850) の *Mischka-Zyklen* と呼ばれる二つの詩群 (1834, 1842) と、詩 *Die drei Zigeuner* (1837) を取り上げたい。

まず、*Er laßt die Hand küssen* の内容を大まかに述べたい。作品は、とある伯爵が懇意の間柄である貴婦人に、昔語りを始める場面から始まる。伯爵のこの昔語り、梓物語の形式を持つこの作品の本編であり、彼の祖母が領地を治めていた時代に起きた、一人の使用人をめぐる事件が語られる。この事件が起きたのは封建制度が厳格であった時代のことであり、伯爵と貴婦人の発言から、当時に比べて今は支配層の権限がはるかに小さくなっていることが示唆されている。<sup>5)</sup> 以下がその事件のあらましである。

4) Vgl. Wolfgang Müller-Funk: Kakanien revisited Über das Verhältnis von Herrschaft und Kultur. In: Kakanien revisited Das Eigene und das Fremde (in) der österreichisch-ungarischen Monarchie. Hrsg. v. Wolfgang Müller-Funk, Peter Plener und Clemens Ruthner, Tübingen 2002. S. 20-21.

5) Marie von Ebner-Eschenbach: Er laßt die Hand küssen. In: Marie von Ebner-

寡黙で真面目、働き者の青年ミシュカは畑仕事に従事していたが、女領主に気に入られ、より条件の良い労働を割り当てられる。ある日女領主は、ミシュカが若い娘と幼い男児と共にいるところを目撃する。「貧しい服装、黒い巻き毛と褐色の肌を持ち、ガンジス河のほとりで生まれたと思われる」と描写される若い娘と男児は一体誰なのか、訝しく思っていた女領主は、ミシュカとこの異国風な娘が愛し合い、子を成していたと聞いて憤る。「使用人には良く配慮する」一方で「男女間の退廃」には人一倍厳格な女領主は、すぐさまミシュカと両親の住む小屋へ近侍フリッツを赴かせ、「ふしだらな関係」を即刻絶つよう命令する。ミシュカは力づくで跪かされ、服従を約束させられる。領土から追放されることとなった娘を追いかけようとしたミシュカと父は諍いを起こし、決別する。父に怪我を負わせ、逃亡したミシュカを、女領主は「六つ目の戒律（姦淫してはならない）に続いて四つ目（あなたの父母を敬え）をも破った」と非難し、特に親への不敬を厳しく断罪することを宣言する。やがて、娘は厳しい旅による疲労で死亡し、子供を抱きかかえ傷を負って帰還したミシュカは、女領主により五十回の鞭打ち刑を言い渡される。刑執行当日、演劇に興じていた女領主の前にミシュカの母が現れ、「今の状態ではミシュカは刑に耐え切れず死んでしまう」として平身低頭、刑の延期を願い出る。女領主はミシュカに恩赦を与えるが、時既に遅く、刑場から恐ろしい叫び声があがる。息せき切って帰ってきた近侍フリッツは冷静かつ慇懃に、ミシュカの死を伝える。<sup>6)</sup>

この作品に描かれる人物の階層は以下の通りである。伯爵の祖母である女領主を筆頭に、ドイツ風の名前を持ち、洗練された礼儀を身につけ、女領主の価値観そのままに行動する近侍フリッツ。作品の題にもなっている Er

Eschenbach Aphorismen Erzählungen Theater. Hrsg.v. Roman Roček, Wien 1988. S.186-187.

6) Vgl. Ebd. S185-205.

laßt die Hand küssen とは、フリッツが良く口にする言葉であり、従者として主人への忠誠を示す発言である。ミシュカの恩赦を伝えるため刑場に向かうが間に合わず、女領主のもとに帰還したフリッツのこの一言で、昔語りは締めくくられる。「彼はよろしくと申しておりました。ミシュカは既に死んでおりました。」<sup>7)</sup>一方、ハンガリー風の名前を持つミシュカは、素朴で無口な人柄であり、フリッツのように洗練された礼儀作法を身につけていない。彼は支配層から見ると十分な矯正が施されていない存在であり、それゆえ女領主の道德観、価値観に力づくで従わされる存在である。そしてミシュカを破滅に追い込むことになる「浅黒い肌」の娘。彼女はインド由来の民族であるジブシーであることを示唆されており、支配層であるドイツ系民族からは最も遠い周縁に配置されていると言える。<sup>8)</sup>ミシュカとジブシー娘の関係は女領主によって道德的墮落と見なされ、彼女はミシュカを矯正しようとする。しかし従者としての立場よりも、ジブシー娘への想いを優先したミシュカは死に追いやられる。このように、他者とは教育を必要とする子供のような存在であり、支配者とは同じような発展を望むことができない「不完全な」人間として描写される。彼らに「他者」として烙印を押す行動には、近代社会の原始的な不安が反映されており、統治の際に「他者」に対してなされる非人間的な扱いを正当化するのに寄与しているのである。<sup>9)</sup>矯正されるべき「他者」は、社会内の統一を目指す動きに伴って生み出される、とルドルフ・シュティツヒヴェー (Rudolf Stichweh 1951-) は論じている。例えば近代国家が成立するには、国家内の言語、文化、価値観の統一が進められなければならない。この国家を基準とした統一化により、それまで社会で認められていた多様性は淘汰され、その結果「国家にとっての他者」が作られるのである。<sup>10)</sup>

7) »Er laßt die Hand küssen, er ist schon tot.«(Ebd.S.205.) 野端訳

8) »Dem Treiben der beiden sah ein junges Mädchen zu, auch ein braunes Ding und so zart und zierlich, als ob ihre Wiege am Ganges gestanden hätte.«(Ebd.S.190.)

9) Vgl. Wolfgang Müller-Funk: Kakanien revisited Über das Verhältnis von Herrschaft und Kultur. In: Kakanien revisited Das Eigene und das Fremde (in) der österreichisch-ungarischen Monarchie.Hrsg.v.Wolfgang Müller-Funk, Peter Plener und Clemens Ruthner, Tübingen 2002.S.21.

フリッツ、ミシュカ、そしてジブシー娘は、皆同様に女領主の価値観や彼女が定める規律の下に置かれている。しかし、彼らの待遇や振る舞いは、中心に位置する女領主からの「距離」によって定められる。中心と周縁の距離は、インド出身の批評家ホミ・バーバ (Homi. K. Bhabha 1949-) が著書、「文化の場所」( *Die Verortung der Kultur* 1994 ) の中で、植民地言説の分析に肝要な概念として論じている。非植民者が、植民者のように振舞うことをバーバはミミクリと呼んでいる。<sup>11)</sup> 彼はミミクリ ( 植民地的擬態 ) を「権力を視覚化してくれる 他者 を領有する、改良と規制と規律との複合的な戦略<sup>12)</sup>」であると述べ、以下のように定義している。

植民地的擬態とはほとんど同一だが完全には同一でない差異の主体としての、矯正ずみで認識可能な < 他者 > に対する欲望ということになる。つまり、擬態の言説はアンビヴァレンスのまわりに構築されているということだ。<sup>13)</sup>

ミミクリを *Er laßt die Hand küssen* に認められる内的コロニアリズムの文脈に読み替えると、女領主とフリッツ、ミシュカ、そしてジブシー娘との間の距離と差異は、被支配層の登場人物がいかに支配層に近い振る舞いをしているか、という点に拠って区別されていることが分かる。擬態とは、どう振舞うべきか、という勢力範囲内の「内的適合性」<sup>14)</sup> が求められること

10) Vgl. Rudolf Stichweh: *Der Fremde Studien zu Soziologie und Sozialgeschichte*. Berlin 2010. S.122-124.

11) ミミクリは「植民地的擬態」と訳される。フランツ・ファノン はミミクリを、非植民者のアイデンティティを蝕み、その主体性を脅かすものとしているが、これに対してバーバは、ミミクリは「差異を抑圧し調和させるのではなく、むしろ実在とは異なりそれを守る」という二重化に基づいた行動であり、植民者との完全な同一化は果たされない。それゆえバーバはミミクリをカムフラージュと似たようなものと論じている。

12) ホミ・K・バーバ 『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳、法政大学出版局、2005年。頁149。

13) 同上。頁148。

14) 参照、同上。頁151。

を前提として成り立っている。つまり、*Er laßt die Hand küssen* においては、領地を支配する勢力とそこに住む人々との適合性が要求されているわけで、フリッツはその要求に最大限応えている。しかしながら、ミミクリとはあくまでもカムフラージュであり、フリッツは支配層と同化することは決してできない。彼の完成度の高いミミクリは、「完全な本物」として現れたいというかなわぬ欲望を示しており、権力の視覚化という、ミミクリが持つ戦略的意義を明らかにしていると言える。

### 3、多数派との関わりから生まれる「他者」のステレオタイプ

次に、ニコラス・レーナウの作品を通して、ステレオタイプ化された他者像を分析したい。

現在のルーマニア（当時のハンガリー王国）に生まれたレーナウは、故郷をモチーフにした作品を数多く残している。*Mischka-Zyklen* と呼ばれる詩群はその一つであるが、この作品の主人公に、レーナウはミシュカという名のジブシーのバイオリン弾きを据えている。

一つ目のチクルス *Mischka an der Theiss* では、ハンガリーのティサ川のほとりでの一夜が描かれている。バイオリンの名手ミシュカが率いるバンドが酒場で演奏しているところへ、三人のハンガリー騎馬兵がやってくる。かつてハンガリー人と共に戦った経験を持つミシュカは、彼らと同胞であり、当時の戦いの様子を華々しく歌い上げる。ここではハンガリー人とジブシーとの間の距離は取り払われ、双方はトルコ人との戦いという共通の経験を通して結ばれている。<sup>15)</sup>

その続編である二つ目のチクルス *Mischka an der Marosch* は、ティサ川からマロシュ川の近くへと居を移したミシュカとその娘ミラの悲劇を描いている。ミラは若い伯爵に求愛され、愛し合うようになるが、伯爵はやがて彼女を捨て、貴族階級の娘と結婚する。伯爵はある日、自分の家系図に描かれたジブシー用の絞首台を見て、ミラとの関係を断とうと決心したのだ。ミラは心痛のあまり死ぬが、伯爵はすぐれた演奏家であるミシュカに

15) Vgl. Nikolaus Lenau: *Mischka an der Theiss*. In: *Sämtliche Werke und Briefe*, Band 1. Leipzig und Frankfurt a.M. 1970. S.369-374.



自分の結婚式でバイオリンを演奏するよう命じる。逆らうことの許されないミシュカは、娘ミラを死においやった伯爵への復讐を、ジプシー特有の力、つまり音楽を用いて成し遂げようとする。ミラの苦しみをメロディーに乗せ、呪いをこめた弓でバイオリンを演奏すると、花嫁は会場から逃げ出し、馬に乗って飛び出した伯爵は、墓穴に躓いて首を折って死んでしまう。<sup>16)</sup>

以上が *Mischka-Zyklen* と称される詩群の内容である。ミシュカやミラのイメージは、伯爵という支配層との対比によって固定化されている。例として、ミシュカはトルコ人と戦ったことによりハンガリー人から同胞と認められるが、それは支配層であるドイツ系民族を意識した連帯感であることは疑いない。もう一つの例として、血統や家柄、秩序を重視してミラを捨てる伯爵と、愛や感情、音楽を最上のものとするジプシーの対比が挙げられる。後者は特に、十八世紀以来ヨーロッパの様々な文化的側面に定着したジプシーのイメージの一つである。こうした他者像の固定化もまた、ポストコロニアル理論で重点的に扱われる問題である。ホミ・バーバは「ステレオタイプ」を植民地言説の主要な戦略と見なし、それに依拠して他者像が構築される契機を論じている。バーバによると、「植民地における権力は生産的であり、欲望と同時に軽蔑の対象としての、起源とアイデンティティの幻想に封じこめられた差異の表現としての」他者性を生み出している。<sup>17)</sup> また、権力の装置である植民地言説の役割とは「被植民者である社会的実体として、すなわち『他者』であると同時に、知ることでもできれば目に見ることも可能な対象」として作り出すことである。<sup>18)</sup>

文化理論家であるスチュアート・ホール (Stuart Hall 1932-) もまた、アイデンティティを生み出すために行われる作動的な「締め出し」について論じている。つまり、どのアイデンティティも「周縁」がなくては成り立たず、またアイデンティティの表象は、欠如や分裂といった否定的な表現

16) Vgl. Nikolaus Lenau: *Mischka an der Marosh*. In: Ebd. S.374-383.

17) ホミ・K・バーバ 『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳, 法政大学出版局, 2005年, 118頁.

18) 同上. 124頁.

により生み出される「他者」を前提としてはじめて可能となる。<sup>19)</sup>

つまり他者のステレオタイプは、多数派の社会にはふさわしくないと判断された特性を付与されたり、多数派が持つ性質を欠いている存在として描かれたりすることにより固定化されていく。欠けた存在である他者を可視化することにより、多数派は「白人にして完全な理想の自我というアイデンティティ」を手に入れることになるのである。<sup>20)</sup> 他者の固定化という点では、ミシェル・フーコー (Michel Foucault 1926-1984) が論じている非理性の表象にも同じ論点を見出すことができる。<sup>21)</sup> フーコーは、十七世紀に起きた非理性に対する受容の変化について言及しており、非理性が人物として具体化、可視化された点を強調している。

十七世紀以来、非理性は、この世界につきまとう主要な執念ではもはやなくなっているし、理性の営為の自然な側面でもなくなっている。非理性は、社会のさまざまな種の領域のなかで自然発生した一変種、人間的な一つの事実という外観をおびる。かつては、人間のさまざまな事象や言語、人間の理性、人間の土地 これらにたいする必然的な危険とされていたものが、今や、人物という形象をおびる。いや、むしろ、さまざまな人物という形象を。非理性の人間とは、社会が認知して別個に扱う人間類型である。つまり、放蕩者、浪費家、同性愛の人、魔術師、自殺者、無宗教の人間がそれである。非理性かどうかということとは、社会規範にたいするある種の距離によって測られはじめる。<sup>22)</sup>

19) Vgl. Stuart Hall: Wer braucht >Identität<?. In: Ideologie Identität Repräsentation. Hrsg.v. Juha Koivisto u. Andreas Merckens, Hamburg 2004.S.172.

20) ホミ・K・バーバ『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳, 法政大学出版局, 2005年, 133頁.

21) フーコーの著作「狂気の歴史 古典主義時代における」(Wahnsinn und Gesellschaft: Eine Geschichte des Wahns im Zeitalter der Vernunft 1961)を参照。

22) ミシェル・フーコー『狂気の歴史 古典主義時代における』田村俣訳, 新潮社, 1975,123頁.

「放浪」、「奔放」、「野性」といったジプシーのステレオタイプもまた、フォーコーが論じたような、社会規範に沿わぬ概念を目に見える存在として表現したいという欲求の結果であると言える。他者像とは、中立的な観察を通して描かれたものなどではなく、多数派の利益のために戦略的に選択されたものである。多数派の肯定的なアイデンティティ構築を可能とするために、彼らには不完全な存在、非社会的な存在としての特性を与えられ、ステレオタイプ化されていくのである。

#### 4、多数派の欲望、反省を映し出す「内なる他者」

しかし他者とは、支配層が自らを優位に立たせるためだけに生み出されるのではない。むしろ同時に、多数派が自らの鏡像を映し出す対象であり、「ヨーロッパ人であること」「文明社会に生きる存在であること」を反省的に意識させるものでもある。「劣った存在」、「不完全な存在」として定義された他者は、それ故に社会のしがらみや義務からはある程度解放されている。それゆえ他者の視線は、多数派が自らの社会や存在を客観的、批判的に見つめる視点と重なることがある。

こうした多数派の自己反省的視線に関連づけて紹介したいのは、レーナウのもう一つの作品、*Die drei Zigeuner* である。この作品でレーナウは、一人のヨーロッパ人旅行者が三人のジプシーとの邂逅を通して受ける衝撃を描いている。ある日ウィーンにいたレーナウが、マジヤール語を話すジプシーに声をかけ楽器を演奏させたことがこの詩を執筆するきっかけになったと言われている。<sup>23)</sup> この作品は七つの詩節からなり、「私」が旅の途上で見かけた三人のジプシーの様子を描いている。フィデルを爪弾き、誰にともなく歌う一人目のジプシー、パイプをふかし、満足げに煙の漂う先を見つめる二人目のジプシー、そして風そよぐ中ツィンパロンを木にかけ、その下で眠りこける三人目のジプシー。三人に共通しているのは、穴と継ぎ接ぎだらけの貧しい身なり、しかしそんな惨めな境遇を自ら嘲笑する姿勢である。三人のジプシーは、それぞれのやり方で、厳しい世のめぐり合わせに晒されているわが身を自嘲している。旅を続けるためジプシー

23) Vgl. Jean-Pierre Hammer: Nikolaus Lenau Dichter und Rebell. Innsbruck 1993. S.71.

達と別れた「私」に、彼らは深い印象を残す。「私」は彼らの浅黒い顔、黒い巻き毛を長いこと見やりながら馬車を先に進める。<sup>24)</sup>

*Die drei Zigeuner* に登場する、窮状に身を置きながらも世界に無関心なジプシー達は、「私」が属する社会に対峙する存在であり、また「私」の厭世観を映し出す存在でもある。この作品の主題は Weltschmerz (世界苦) に対する人間の処し方である<sup>25)</sup>。

彼らは三様に私に示した、人生に翳りが射した時、  
いかに煙や眠りやフィードルでやり過ごし、三度笑い飛ばしてみせる  
かを<sup>26)</sup>

旅人である「私」は世界に対する彼らの「やり方」を目にし、共感を抱くと共に彼らと同一化することのできない「ヨーロッパ人である私」を意識するのである。ジプシーの「世界への軽蔑」に、旅人は自らが感じている europamüde (ヨーロッパに対する嫌悪) を重ね合わせ、自らがやってきて、そして帰っていく「文明社会」の抑圧とそれに対する不満を意識するに至る。<sup>27)</sup> ジークムント・フロイト (Sigmund Freud 1856-1939) は、「文化への不満」(*Das Unbehagen in der Kultur* 1930) において、文化を「人間の生活と、人間となる以前の動物的な祖先の生活の違いを作り出したもの」であり、「自然の脅威から人間を保護し、人間の相互的な関係を規制するという二つの目的に役立つすべての機能と制度の総称である」と定義している。<sup>28)</sup> 結果、発達した文化は個人の自由を制約するようになり、自由への憧れが文化と対立するという事態も起こり得る。<sup>29)</sup> レーナウの作品に描

24) Vgl. Nikolaus Lenau: Hrsg.v. Gudrun Heinecke, Wien 2000.S.96.

25) Vgl. Ebd.S.97-98.

26) »Dreifach haben sie mir gezeigt, wenn das Leben uns nachtet, wie man's verraucht, verschläft, vergeigt, und es dreimal verachtet« In: Ebd.S.96. 野端訳

27) Vgl.Ebd.S.98.

28) ジークムント・フロイト 『文化への不満』(『幻想の未来/文化への不満』中山元訳, 光文社, 2007年) 178頁.

29) 参照, 同上. 190頁.

かれたジブシーは、多数派の文化に保護されていない存在である。特に *Mischka-Zyklen* の中でミシュカが音楽と呪いの力で復讐する場面は示唆的である。エーブナー＝エッセンバッハの *Er laßt die Hand küssen* において女領主の権限で生命の与奪を決定されてしまうミシュカのように、*Mischka-Zyklen* 中のジブシーも法的な保護や権利は認められない弱い存在である。それは伯爵の家系図に描かれたジブシー専用の絞首台も暗示している。事実娘ミラを奪われたミシュカは、法律上、制度上は伯爵を断罪できる立場にはなく、それゆえに音楽の魔力に頼るしか復讐する術がないのである。しかし、この「社会、文化に守られていない」という側面はすなわち、文化に抑圧されていない存在であることも意味している。それゆえ他者は、社会の中の抑圧を感じている者にとっては自由への希求を映し出す対象でもあるのだ。

前章では他者のステレオタイプ化と多数派のアイデンティティについて述べたが、ステレオタイプ生成の二面的な側面は見過ごされてはならない。バーバによると、ステレオタイプとは「偽りのイメージを設定して、それを差別行為のスケープゴートにすることではない。ステレオタイプはもっとずっとアンビヴァレントなテキストで、外への投射（プロジェクション）と内への投入（イントロジェクション）、隠喩と換喩の戦略、置き換え、重層決定、罪の意識、攻撃性などといったさまざまな要素が絡み合っている。<sup>30)</sup>」他者像に投影させて自らのアイデンティティを構築する行為は、一義的なものではない。他者と自己の比較、他者への自己の投影を通して反省的に自己定義する行為もまた、看過してはならない植民地言説の重要な側面である。

## 5、総括

本論文では、近年ポストコロニアリズムに与えられた新たな視点に着目し、それを手がかりにヨーロッパの「内なる他者」であるジブシーの表象を分析することを試みた。ポストコロニアリズムが拡大解釈されたことに

30) ホミ・K.バーバ『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳、法政大学出版局、2005年、142-143頁。

より、それまで扱われていた十六世紀以来の「ヨーロッパ対植民地」の力関係の他に、ヨーロッパの民族間の人種的、文化的、政治的不均衡、すなわち「内的コロニアリズム」もまた、その分析対象として扱うことが可能となった。特に、多民族をその内に抱えていたハプスブルク帝国は、ドイツ系民族の言語、文化、価値観と他の民族に属するそれらの間に明らかな優劣が設けられており、「内的コロニアリズム」の最も象徴的な事例とされる。本稿で扱ったエーブナー＝エッセンバッハやレーナウの作品中のジブシーは、社会の支配層であるドイツ系民族から最も遠い周縁に位置され、中心との距離に応じて他者を定義する内的コロニアリズムの権力関係を効果的に示している。ホミ・バーバのものをはじめとするポストコロニアル理論を手がかりに進めたジブシー像の分析により、他者の表象を巡る三つの側面が明らかとなった。一つ目は植民地的擬態の完成度に基づく被支配民の階層化、二つ目は矯正されるべき存在、不完全な存在として描かれた「他者」に依拠する、多数派の肯定的なアイデンティティ構築。三つ目は多数派が自己や社会に対して抱いている不満や欲望を投影する対象としてのある「他者」である。

内的コロニアリズムはヨーロッパに限られるものではなく、さらに広い範囲に適用され得る概念である。例えば、単純な民族構成を持つと言われる日本においても同じように「内なる他者」は必要とされ、作り出されてきた。その一例として、大正から昭和初期にかけて新聞記者三角寛(1903-1971)によって生み出され、世間に広められた「サンカ」と呼ばれる人々のイメージが挙げられる。三角寛が数多くのルポルタージュや小説に記したサンカの放浪生活、独特の風習、民族的由来は広く世間に知られ、市民社会に対峙する存在である「サンカ」が生み出されるに至った。彼らはヨーロッパにおけるジブシーと同じように、市民の多数派としてのアイデンティティ確立に寄与したと同時に、近代社会の秩序に縛られない存在として、憧憬の対象にもなった。このように、「他者」を生み出す権力装置はどの社会にも内在する。共同体が統一化、均一化を進める度合いが強いほど、多様性を認める余地は少なくなり、「正常な市民」としての意識や連帯感を作る拠り所となる「他者」の必要性は増すからである。今後は、ユダヤ人、亡命者、イスラム文化圏からの移住者など、ジブシー以外の

「内なる他者」のイメージと、社会における彼らと多数派との対置関係に着目し、より多角的に「他者像生成のメカニズム」の分析に取り組んでいきたいと考えている。

(ウィーン大学人文学部ドイツ文学専攻博士課程在籍)

# Das Verlangen nach dem inneren Anderen

Eine Analyse der Zigeunerbilder unter dem Aspekt postkolonialistischer Theorien

NOBATA, Satomi

Im Allgemeinen wird der Begriff „Postkolonialismus“ folgendermaßen definiert: Der Postkolonialismus zielt darauf ab, den Kolonialismus zu dekonstruieren und die Machtverhältnisse zwischen Kolonisierenden und Kolonisierten ans Licht zu bringen. Heutzutage wird der Postkolonialismus nicht nur mit der Beziehung zwischen Kolonialmächten und geographisch entfernten Kolonien assoziiert, sondern wird auch in einem weiteren Sinn interpretiert. Der Diskurs, demzufolge man den „Anderen“ voraussetzen muss um sich dann von ihm damit kontrastieren zu können, existiert auch innerhalb der Machtverhältnisse der sogenannten europäischen Binnenkolonien.

Österreichische Kulturwissenschaftler verweisen darauf, dass es auch innerhalb der habsburgischen Monarchie ein politisches, kulturelles und ethnisches Zentrum und eine Peripherie gibt. Der obersten Schicht gehören die deutsche Ethnie, Sprache, Wertvorstellungen, usw. an und darunter stehen die anderen Ethnien aus den Nachbarländern. Die verschiedenen Ethnien werden gemäß dem Abstand zum Zentrum hierarchisch angeordnet. Es gibt allerdings bei der Wahrnehmung außereuropäischer und inneuropäischer Fremder in der multiethnischen Monarchie Ähnlichkeiten.

Basierend auf der oben genannten Theorie wird in dieser Abhandlung der Entstehungsprozess des Fremden innerhalb der Gesellschaft behandelt. Unter den verschiedenen Minderheiten werden Zigeuner (heutzutage werden sie offiziell Roma und Sinti genannt) spezifische Eigenschaften nachgesagt und von den Europäern distanziert dargestellt, sodass die Grenze und der Kontrast zwischen



Mehrheit und Minderheit akzentuiert werden.

In der Erzählung von Marie von Ebner-Eschenbach (1830-1916), *Er laßt die Hand küssen* (1886), formen die Gutsherrin, der Kammerdiener Fritz, der Feldarbeiter Mischka und das Zigeunermädchen eine Hierarchiestruktur, in der sie sich durch Namen, Benehmen und Aussehen voneinander unterscheiden und distanzieren. Die Unterwürfigkeit und Mimikry der Beherrschten gegen den Herrscher, in diesem Fall gegen die Gutsherrin, funktionieren als ein Maßstab, wie fern sie vom Zentrum stehen. Andererseits beschreibt das Gedicht *Die drei Zigeuner* (1838) des österreichischen Dichters Nikolaus Lenau (1802-1850) den tiefen Eindruck eines Europäers bei seiner Begegnung mit drei Zigeunern. Dass die Zigeuner trotz allen Pechs mit ihrer Situation zufrieden sind und kein Interesse an seiner Welt haben, hinterlässt bei dem Europäer einen Schock. Lenau hat auch in den *Mischka-Zyklen* (1834, 1842) das Verhältnis zwischen Zigeunern und den Adeligen deutlich beschrieben. Die unglückliche Liebe, die eine Zigeunerin dem Graf widmet, zeigt eine unüberwindbare Kluft zwischen Zigeuner und Adeligen.

Bei dieser Analyse geben die Identitätstheorie und Stereotyptheorie wichtige Hinweise. Der englische Soziologe Stuart Hall (1932- ) thematisiert in *Wer braucht Identität?* (2001) die Identitätskonstruktion der Mehrheit durch das Abstempeln des Fremden als „mangelndes“ Wesen. Der indische Kritiker Homi Bhabha (1949- ) behandelt in *Die Verortung der Kultur* (1994) die Problematik der Stereotyp und Mimikry bei der Darstellung der Fremden. Er beachtet dabei besonderes auf *die produktive Ambivalenz des Objekts des kolonialen Diskurses*.

Die Wahrnehmung des inneren Fremden als unvollendetes Wesen trägt dazu bei, sich selbst als modernisiertes Wesen zu deklarieren, und dadurch rechtfertigen, den Anderen zu beherrschen und disziplinieren zu dürfen. Das heißt, er soll einen gewissen Abstand zu dem im Zentrum Stehenden halten. Trotzdem muss er in die gleiche Gesellschaft oder Machtstruktur miteinbezogen werden. Darüber hinaus wird in das Andere, wie das Gedicht von Lenau gezeigt hat, die Sehnsucht der Mehrheit hineinprojiziert. Die postkolonialistischen Theorien dienen dazu, diesen ambivalenten Stereotyp des Fremden mehrschichtig zu analysieren.